

hongentsuikyū
2021 spring
vol. 02
類設計室

本源追求

本源を見つめる。
その先に
未来がある。



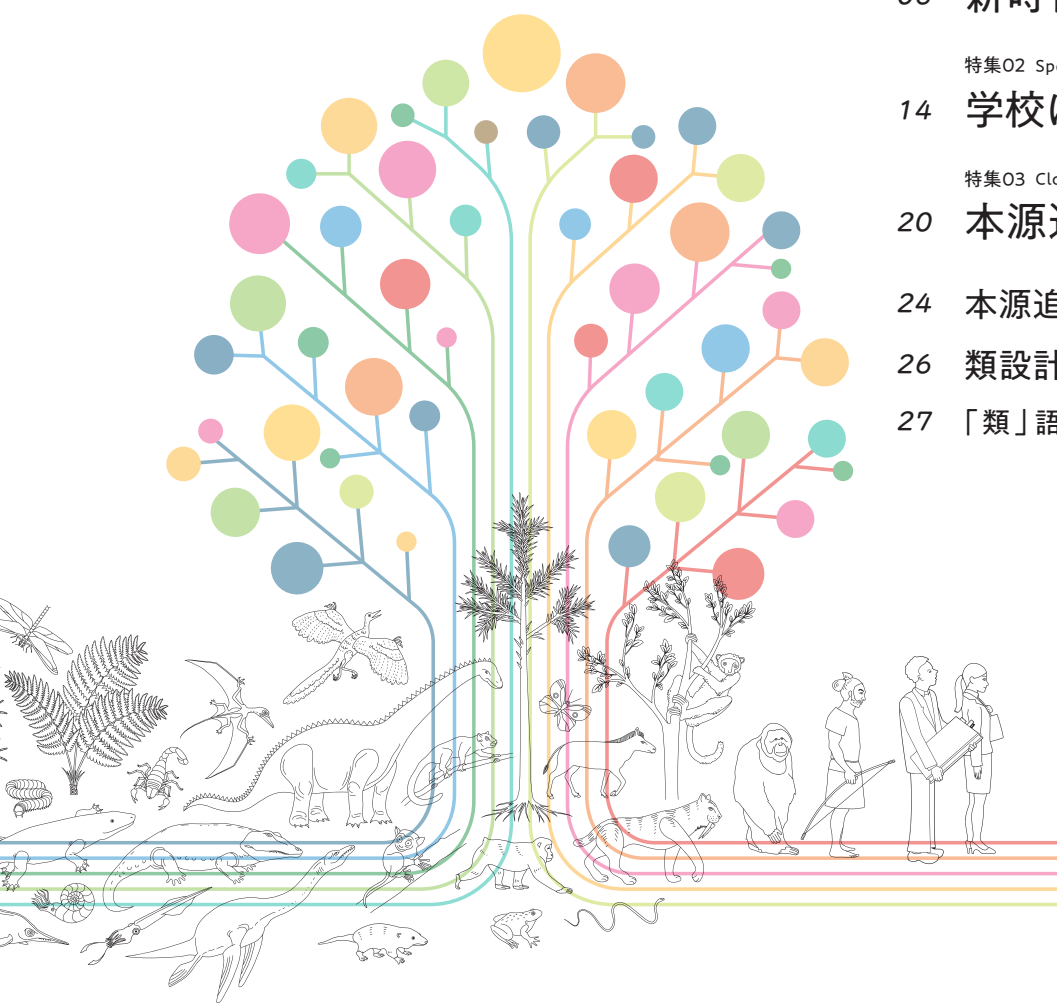
RUI SEKKEISHITSU

特集◎「学び」を
どうつくる？

本源追求

contents

- 04 「学び」をどうつくる？
特集01 Project Story 追手門学院中・高等学校
- 06 新時代の学び舎を求めて
特集02 Special Talk 全国高等学校長協会 萩原会長
- 14 学校は「使い方調査」でさらに育つ
特集03 Close Up 類学舎
- 20 本源追求で実現した〈類学舎〉
- 24 本源追求のいま
- 26 類設計室とは
- 27 「類」語辞典／「類」人辞典



発行 _ 株式会社 類設計室

●大阪本社 〒532-0011
大阪府大阪市淀川区
西中島 4丁目3-2 類ビル

●東京本社 〒144-0052
東京都大田区蒲田 5丁目38-3
蒲田朝日ビル

<https://www.rui.ne.jp>

撮影 _ 坂本泰士

デザイン _ 中野一弘 (bueno)

制作 _ 株式会社 ハタジルン

本源を見つめる。
その先に
未来がある。

「設計事務所らしくない設計事務所」。
そんなお言葉をよくいただくのは、
私たちが、空間づくりだけでなく、
組織づくり、人づくりを含めたご提案をさせて
いただくことが多いから。
お客様の経営、事業の根幹に関わる
あらゆる課題に踏み込むのは、
本来あるべき姿を描くために、
根源的な問いを繰り返してきた結果です。

人びとの活力を再生するデザインとは何か。
自然の摂理に則った循環型のデザインとは何か。
あるいは、集団とは、人間とは何か。

ある時は人類史にまでさかのぼり、
またある時は生命原理に立ち返りながら
地球の課題、人類が直面する課題をも
深く掘り下げていく。

ものごとを源から、追求し続ける。
その先に、未来があると私たちは信じています。



なぜ、勉強するのか？
なぜ、学校へ行くのか？
なぜ、教える教育なのか？

これまでの画一的な学校教育のあり方が、
子どもたちの自ら学ぶ主体性を潰してきました。

大転換の時代に求められるのは、何があっても生き抜く力。
正解のない課題に、主体的に立ち向かう追求力。
仲間に期待し、応え、活力を高め合う充足力。
それらが統合された「人間力」が求められます。

そのために必要なのは、
固定観念から脱して自分の頭でものを考えること。
その立脚点になるのは、
子どもたちの本能であると考えています。
子どもたちの本能を解き放つ、
本源の学びの場（建築）づくりが私たちの使命です。

本誌では、類設計室が携わってきた
“学びの場づくり”について、
共にプロジェクトを進めてきた先生方との対話で
深く掘り下げていきます。

「学び」を どうつくる？



特集 01 | Project Story |

追手門学院中・高等学校

新時代の 学び舎を求めて

Keyword

- 受験・偏差値のための教育に疑問を感じていた。
- 意欲さえあれば、子どもは自ら学んでいく。
- 学び場と遊び場は本来イコールで良い。

特集 02 | Special Talk |

全国高等学校長協会 萩原会長

学校は「使い方調査」で さらに育つ

Keyword

- 学校を建てるのが、目的になってはいけない。
- 建物のコンセプトが継承される意義とは。
- 子どもたちが“自ら学びたくなる場所”づくり。

特集 03 | Close Up |

類学舎

本源追求で 実現した〈類学舎〉

Keyword

- 上から教える教育は成長原理に反する。
- 遊び・仕事・探求が社会を生きる力に。
- 子どもたちにどれだけ現実の圧力を共有できるか。



『日経アーキテクチャ
2020年9月10日号』調べ

類設計室が「学び」を追求する理由

類設計室は、「学び」「仕事・生産」「地域自治」の三つを軸に、それら
を貫く「人づくり（集団・組織づくり）」を日々追求しています。なかでも「学
び」の追求に力を入れる理由は、「学び」こそが「人づくり」における原
点だと考えているから。類グループでは設計事業とともに、類学舎や類塾な
どの教育事業も多角的に経営してきました。その姿勢がお客様からの信頼
を集め、2019年には教育・研究施設の実績で「業界 No.1」という評価も
いただいています。これからもお客様・地域のみなさまと共に、子どもたち
の活力を取り戻すため、学びの本源を追求していきます。

新時代の学び舎を求めて

学校
法人

設計
事務所

学校法人と設計事務所が一体となって推進した、追手門学院中・高等学校の新校舎プロジェクト。2019年に完成した新校舎では、これまでにない学び、そして学び場づくりを実践されています。今回の対談では、本プロジェクトが生み出した成果や現状を追うとともに、大きく変化するこれからの時代にどのような学びを創っていくべきか、追手門学院中・高等学校の先生方と議論してみました。

株式会社 類設計室
計画房

網野琢馬

基本構想段階からデザインとプランの検討を担当。お客様とともにこれまでにない学校をつくるため、学びの中身から校舎のあり方を追求した。

追手門学院中・高等学校
探究科主任/探究デザイナー

池谷陽平

大阪府立箕面高等学校に8年間勤務。現在、追手門学院中・高等学校3年目。今年度より開設した「探究科」主任。探究メディア『O-DRIVE』責任編集者。

追手門学院中・高等学校
学校長

木内淳詞

1987年に追手門学院中・高等学校に赴任。2008年に教頭に就任し、2012年に追手門学院大手前中・高等学校へ異動、教頭2年、校長4年を務めた後、2018年より追手門学院中・高等学校の校長を務め、現在に至る。

追手門学院中・高等学校
教頭

辻本義広

2020年、教頭に就任。新校舎の設計にも携わり、校舎すべてが学びの場になるように、次世代の「新校舎」「新教育」を目指している。

株式会社 類設計室
ディレクター

喜田育樹

本プロジェクトの設計統括を担当。安威キャンパスの校舎から、この新校舎、そして施設の使い方まで、一貫して生涯パートナーとして関わる。

——対談を始めるにあたって、まずは追手門学院中・高等学校（以下、追手門中高）の教育理念を教えてください。

木内 教育理念である「^{どくりつじきやう}独立自彊・^{しゃかいゆうい}社会有為」は、学院130周年の際に当校の創設者である^{たかしまとものすけ}高島綱之助先生の言葉をもとにつくったものです。「独立自彊」は社会を構成する成熟した人間となることを意味し、そして「社会有為」は自分が得た技術や知識を社会のために使うことができる人材となることを示しています。先の見えない現代においては、どのような課題も「絶対にこうだ」という答えがあるわけではありません。多様な人たちがそれぞれ考え、意見を出し合い、進むべき方向を決めていく。みんなで力を合わせて課題を突破していく民主的な社会。それが、これからのあるべき社会の姿だと思います。そのためには短絡的な思考ではなく、ものごとを多角的に判断できる「成熟した人間力」を備えた人材を社会の一員として育てる必要がある。幸い、追手門中高は、先生も生徒もいろいろなタイプの人っていて、多彩な意見が揃っています。校長としてまとめるのは大変だけど、この多様性こそが追手門中高の強みです。

辻本 じつは、この理念ができるまでは、中学と高校とで教育内容はバラバラでした。共通の言葉を掲げ、ビジョンを統一したことで、追手門学院として実現できる学びの可能性が広がったように思います。

追手門学院中・高等学校 概要

所在地 大阪府茨木市太田東芝町1-1
主要用途 学校
施主 学校法人 追手門学院
施工会社 株式会社 竹中工務店
敷地面積 64,415.05㎡
建築面積 5,903.72㎡
延床面積 14,009.04㎡
階数 地上4階
最高高 19.95m
主体構造 鉄筋コンクリート造
一部 鉄骨造
設計期間 10ヵ月
施工期間 19ヵ月

「どんな人間に育ててほしいか？」
その問いこそが、プロジェクトの原点。



はじまりは、2030年の未来予測と
学校教育への疑問から。

——総持寺キャンパスへ移転するにあたり、
追手門中高さんとは多くの議論をしましたが、
振り返ってみてどうでしたか。

木内 現場のことを知らない業者の方が設計をして、ただ学校の上層部から「建てたからこの校舎を使ってね」ということは避けたい、と思っていました。類さんとともに作りあげた当校舎には、経営層はもちろん、現場の先生方の考えもしっかり反映されています。

辻本 どんな新校舎にするかを考えるにあたり、議論の起点となったのは「2030年ってどんな社会？」という問い。新校舎が建ってから、そこで生徒が学び、社会へ飛び立つまでを考えると、10年後の社会情勢まで見据える必要がありました。ただ、先生たちとさまざまな可能性を話し合いましたが、未来のことは誰も正確に予測できない……。結局は2030年を迎える頃、生徒たちが「どんな人に育ってほしいか」との議論に至りました。どんな社会になろうと、持っていてほしい力とは何か。どうすればその力が身につくか。これらの視点を軸に、学び場のあり方を考えました。そして、もうひとつ。社会に出るための学び場である学校教育が、「受験のため、偏差値のための教育」に終始し、いつまでも変わらないのはおかしい、とモヤモヤしていたんです。だから**新校舎では「学びの中身から変えよう。カテゴリーも校舎も、今までの学校から変えよう」と、類さんとともに教育の歴史や文献調査、先端的な教育の事例調査や視察を重ねて、新教育の実現を目指しました。そうして生まれたのが、3つ**



の教育コンセプト。①基礎的な知識・技能を習得するための「個別型学習」、②教え合い・学び合いの場で知識を応用していく「協働型学習」、③教科の枠を超えた実践的プログラムの「プロジェクト型学習」です。校舎と教育の内容が分断されることなく、**教育コンセプトから設計コンセプトを導き出し、相互に行き来しながら検討を重ねられたことは本当に良かったと感じています。**

喜田 先生方と設計事務所が、ここまでいっしょになって設計を進めた事例はほとんどないはず。今回実現できた基盤には、先生方が今の教育に対して危機感を肌で感じていたからではないでしょうか。今思うと、以前、安威キャンパスの中高校舎を設計させていただいた時から、先生方の意識変革が始まっていたように思います。

辻本 安威キャンパスの時にさまざまな挑戦をしましたが、先生たちの意識を変えるにはまだ時間が必要でした。総持寺キャンパスではこれまでにない校舎をつくることで、先生たちの意識変革をもっと加速させたいなど。しかし急に新教育に振り切った校舎にすると使いこなせなくなる懸念もあり、過渡期として新しい挑戦をしつつも、従来通りの使い方もできる校舎にしました。ただ、新校舎を建てて「新しい教育をします！」と表明したことで、池谷先生をはじめ、学内外から賛同者が集まってくれたことは大きな変化でしたね。

新校舎プロジェクトの軌跡



先生の役割は「教える」から「学びをファシリテートする」へ。

——現場の先生としては、新校舎の使い勝手はどうですか。

池谷 私が担当する探究授業では、「自分で考える力」を身につけるとともに、自分の本当の想いに気づくことも大事にしています。クラスの友だちとしか接していないと、自分の夢や想いを話しにくくなる。自分を知らない人の方が、率直な思いを話しやすくなったり、発想力と議論が活性化します。だから探究授業では、2クラス以上を混ぜて、あえて馴染みのない生徒同士でグループを組ませています。その時に教室の壁を開いて、複数の教室と共用部分のスペースを繋げられるつくりがとても役に立っています。

網野 探究授業と従来型の授業をどこまで両立させるか、というのが設計段階でも議論になりました。

池谷 教育で一番大事なのは「知識を得るまでのプロセス」だと考えています。本来「もっとこうしたい」という想いがあるからこそ、人は学びに対して貪欲になります。戦前の日本でも、そんな想いの中で大人と子どもがいっ

しょになって学んでいましたが、明治時代以降、工場生産要員としてマニュアル人間を育てる教育になってしまった。よく「自分で考えられない子どもが増えた」といって、もっと勉強をさせようとする大人がいます。しかし、子どもたちは「知識がないから考えられない」のではない。「こんなことがしたい！」という意欲さえあれば、そのために必要な知識を自ら得ようとするし、それを活用して考えるようになっていきます。

「こうしたい！」という目標実現の手段として、受験や就活が必要ならば、子どもたちは自ら勉強しはじめるでしょう。その時に役立つのが従来型の授業です。意欲を引き出す「探究授業」と、知識を習得する「従来型の授業」。この両者を行き来しやすい新校舎は、実現したい学びに合っています。

辻本 これからの先生の役割は「教える」ではなく「学びをファシリテートする」になっていきそうですね。ファシリテートするってどういうことなのか、から校舎を考えても良かったかな。検討過程では「ホワイトボードや黒板、教室の壁もいらないんじゃないか？」という意見もありました。もっとトガった校舎にしても良かったな、と感じています。



喜田 学び場も時代の変化に合わせて塗り重ねていくことが大事ですね。「もっとトガった」という言葉には、まだまだ常識を超えられる！という伸び代を感じ、勇気をもらいました。

新校舎に移り、「変わってきたな！」という手応えを感じた。

喜田 新校舎での新たな学びを実践させてみて、子どもたちの意欲・活力、主体性はどうなりましたか？

辻本 生徒たちの表情の豊かさや明るさ、学びに対する姿勢や集中度は劇的に変わりましたね。たとえば生徒会。これまではずっと高校2年生が生徒会長を務めるという暗黙のルールがありました。でも新校舎に移ってからの選挙では、高校1年生から立候補者ができて……。この時は「おっ！ 変わってきたな！」と感じました。

あらゆる“枠”を取り払って一体に。 新しい学びの風景。



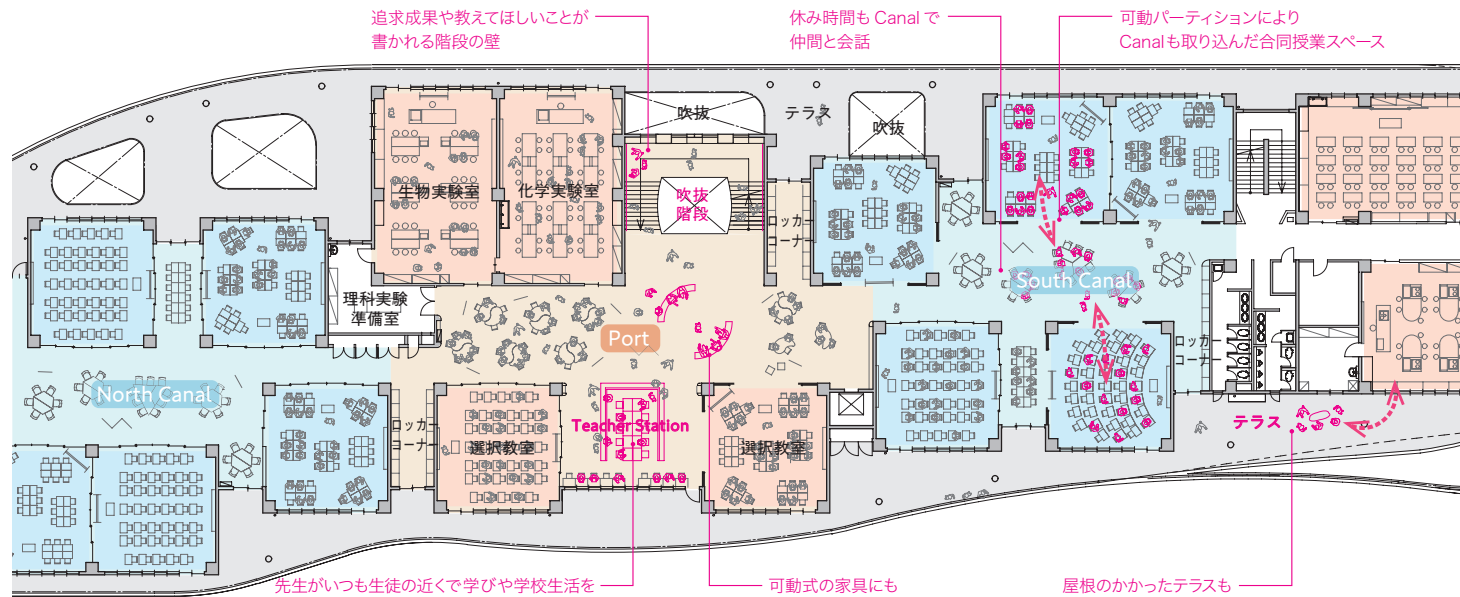
階段の壁面はホワイトボードになっている。広報物の展示以外にも、生徒の疑問や先生からの問題が出されており、校舎内を移動するときにもさまざまな発見が生まれる。



校舎全体が図書館になっており、各階にはそれぞれのテーマに沿った本が並んでいる。校舎中が学びの場なので、気になったことがあればすぐに調べられる設計になっている。

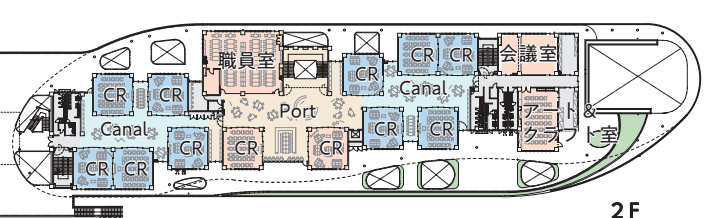
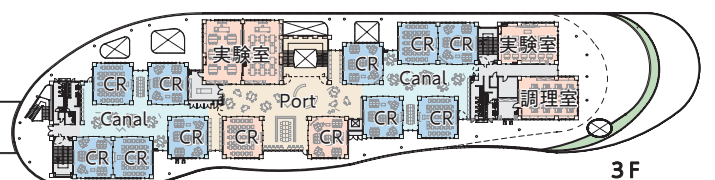
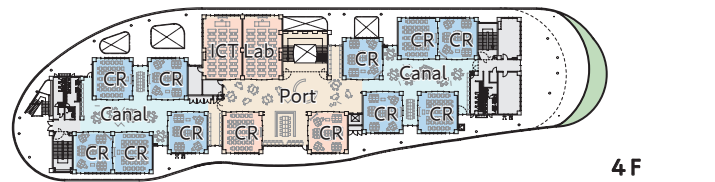
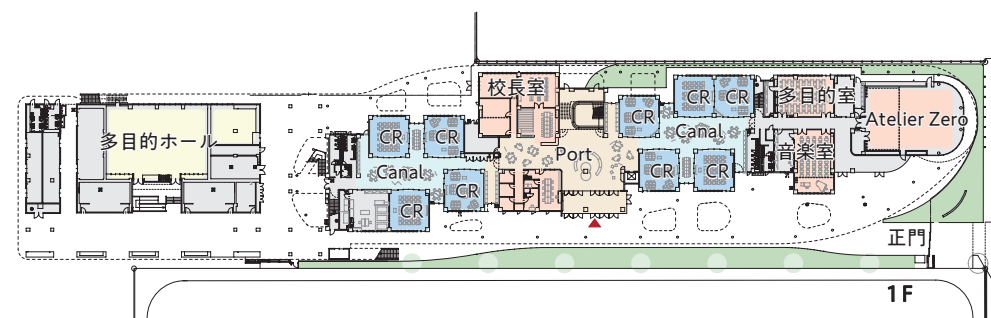
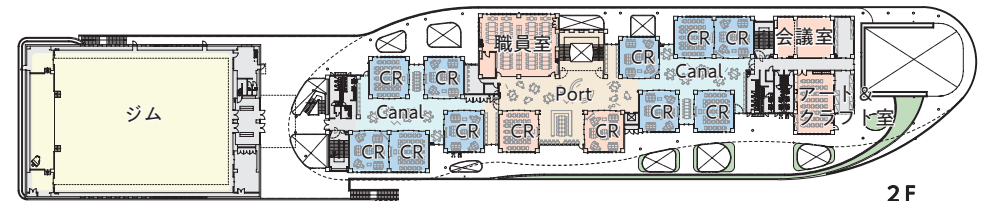


職員室とは別に、各階にティーチャーステーションを設置。明るく開かれたティーチャーステーションには、生徒たちが気軽に先生とおしゃべりや質問をしに集まってくる。



3F 拡大平面図

学び場の領域を3つのクラスター（Port、Canal×2）として、それぞれのクラスターを雁行させながら接続し、空間に変化を付けることで、生徒の好奇心を喚起する計画です。1階を中学エリア、2～4階を高校エリアとして、開放的な中央階段で結び、生徒みんなの学びを繋げます。



2つの教室を繋げた探究授業。それぞれの教室を行き来して、みんなで議論したり成果を確認し合いながら課題に取り組む。共用部も含めてひとつの学び場になっている。



教室とつながる活動の場「Canal」は、探究授業での活用だけでなく、ウェブ授業や部活の打ち合わせ、他学年の友だちとおしゃべりする場、先生の打合せスペースとさまざまな使い方ができる。

各室から出られる広いテラスは、生徒の遊び場でも学び場でもある。広い場所が必要な美術などの課題の際は、テラスまで作業場を広げて授業を展開。





偏差値教育から脱却し、 「社会で生きる力」を学ぶ場へ。



偏差値が「学びの本質」を 見えなくする。

——新たな学びに挑戦するうえで、何か課題
となっていることはありますか。

木内 私たちは学校法人。お客様である生徒
さんに来てもらわなければ教育自体ができま
せん。なので、社会的に理解されるような教
育方針を掲げる必要があり、実現したい学び
との乖離が生まれることもあります。受験生
は、たいてい学校を偏差値でしか見ません。
受験の面接時にも、生徒さんは「追手門中高
の偏差値はいくつですか？」と聞いてきます。

「偏差値が高い＝すごい」という固定観念が、
何を学びたいのか？という本質を見えなくさ
せていると感じます。その点、類さんの「類
学舎」は、勉強ではなく遊びや仕事、探求
を軸にカリキュラムを組み立てられていて、
「社会で生きていく力を身につける」という、
学びの中身を最優先にされているなど感じま
した。

喜田 類学舎の入学条件は「親を説得するこ
と」、それだけです。親御さんを説得でき
るかどうかで、子どもたちの本気度を見る。入
学時から「未来を切り開く人材」を育てるた
めの学びがはじまっています。類学舎の子
どもたちを見ていて感じるのは、立ち振る舞
いや意識、考えがあっという間に大人びてい
く、ということ。類学舎の担当者いわく、自分
たちが社会的に新しい学びに挑戦している自
負を持っているそうです。何のために学ぶの
か、その成果が社会にどんな影響を与えるの
か。子どもたちが自ら考えているから、おの
ずと行動も変わってくる。実社会と繋がり
を持ち、子どもたち自身が学びの場をつ
くっていくのは、大きな成長につながります。

学びも遊びも生活も仕事も、 本来は全部いっしょ。

——「これからの学び場」を、どのようにし
たいとお考えですか。

池谷 私学は、育った環境や学力が同じよう
な子どもたちが集まりやすい。すると、価値
観なんかも似てくるから、なかなか議論が活
性化しない。本当はいろんな生い立ちや価値
観を持った人間が集まって、グワーッと熱量
のある議論ができる学び場にしたい。学年、
男女、中高の垣根を超え、もっと混ぜていき
たいです。

木内 生徒自身から「こんなことしたい！」
という声が、もっと聞こえると良いですね。
教育理念で「成熟した人間力」と言いました
が、成熟とは思考が複雑になることだと考え
ます。外からの刺激に対して一方通行ではな
く、いろんな角度からものごとを判断し、自
分の意見として発信できるかどうか。これま
では先生の言葉の受け売りだったものを、生
徒自身の言葉に昇華して出てくるようにした
いですね。



「ネガティブな "あるある" をゆるキャラで表現(問題提起)しよう」をテーマと
した、探求授業の様子。仲間と共同作業や意見交換を重ね、それらを取りまと
めながらチームで成果を出す力を身につける。



全学年が利用する校舎中心の階段では「グリコ」で遊ぶ生徒の姿も
見られた。広い階段は、他学年との交流を生み出す場になっている。

網野 類グループでもまさにそこを追求して
います。もともと赤ん坊は外からの刺激を自
分の興味関心に昇華し、いろんな試行錯誤を
しながら動き回る。でもいずれ学校に行き、
やりたくない勉強を強制的にやらされる中で、
ああしたいこうしたい、という主体性が抑え
込まれてしまうのです。

辻本 「主体性」って難しい言葉ですよ。ね。
その本質は「主観と客観の融合」だと考えて
います。自分の気持ちで動くことも大事だけ
ど、第三者の視点で考えられることも非常に
大事。そしてこの本来の主体性を身に付ける
ことができるのが、小さい頃の仲間との遊び
です。幼稚園などでは、遊びと学びがイコ
ールで繋がっていますが、学校に入るとそれが
分断される。遊び場と学び場は本来イコ
ールで良い。遊び場がそのまま校舎になるのが理
想的ではないでしょうか。これから校舎を建
てる学校さんには、いろんな遊び場をつくら
せてほしい。各学校が特色のある遊び場を持
って、公園みたいに街へ広がると面白いなあ
と思います。

喜田 類グループでは「仕事も遊び」と言わ
れています。仕事ができない人間は仕事を楽
しんでいないし、成果もなかなか上がらない。
一方で優秀な経営者の方は、みんな遊び盛
りの子どもみたいにキラキラしています。

池谷 ライフワークバランスって言葉があり



ますが、それもおかしな話ですよ。仕事も
生活も学びも遊びも、本来は全部いっしょ
なんですよ。

網野 遊びから遠ざかる小学校を経て、中学
校、高校……と対象世界を広げていく中で、
幼少期に持っていた主体性をどう取り戻すか。
今後の学びを考える上でも重要なポイントに
なりそうです。

池谷 もっと社会と繋がった学び場が必要だ
と思います。例えば、親のコワーキングス
ペースがあったり、地域の人たちがもっと学
校に入ってきてやすかったり……。最終的に
は学校自体を社会にしたい。そうしないと、
本当の社会のことを何も知らずに育ってしま
います。過保護にならず、生徒をもっと外に
連れ出してあげたいですね。

木内 実は現在、「受験勉強・偏差値偏重」
から脱した、学びの本質を実現するための新
コースも構想中です。類さんとも意見交換
できたらと思っているので、その時はまたよ
ろしくお願いします。

——最後に類設計室と取り組んでみていかが
でしたか？

池谷 「学校の受験塾化」の加速により、子
どもたちの活力や主体性が奪われていく。類
さんはそんな様子を見かね、「類学舎」とい

う学びの本質を問い直す学校をつくられたの
だと思います。追手門中高も学校のあるべき
役割として、今後も学びの本質に迫りたい。
設計事務所、塾、学校という枠を越えて、と
もにこれからの学びを追求する同志として、
今後も協力していきたいです。

辻本 新校舎プロジェクトで一番良かったの
は、「設計業者と発注者」という契約の関係
ではなく、ともに新しい学び場を考えるパ
ートナーになれたことです。これからはもっ
と子どもたちの主体性の喚起につながる遊び
の場や、生徒と地域が繋がり、ともに学んで
いける、社会が一体となった学び場づくりに
期待します。

木内 東京では数校の私学が協力し合って学
校説明会を行っていると聞きました。これま
で他校さんとは偏差値を指標として受験者
を取り合う構造にありましたが、それはもう古
い。これからの時代は「どんな想いで、どん
な教育をしているか」が問われます。教育
内容で各校が色を出していけば、協力するこ
ともできるはず。そういった各校の切磋
琢磨を加速するためにも、教育施設の実績が
多く、各法人さんから信頼されている類さん
には、学校を繋ぐ役割を担ってもらい、学び
の変革の核となっていただくことを期待して
います。

喜田 ありがとうございます。現在、追手門
学院大学さんの新校舎でもお世話になってい
ますが、そこでも理事長から「中高大とい
う枠を取り払い、追手門学院総体としての学
びやキャンパスを追求してほしい」と期待を
いただいています。中高大の連携も見据えて、
今後もいっしょにこれからの学びを考えてい
きたいです。本日はありがとうございました。



学校は、建ててからがはじまり。

——新校舎を使い始めて、6年。都立昭和高等学校の「学校使い方調査」の結果をご覧ください。なられていかがでしたか？

萩原 多くの公立校は数年で校長が入れ替わる背景もあり、現場の教員たちではなく教育委員会の意向で校舎がつくられます。そのため校舎を建て終えたら、設計事務所さんとの関わりは終わってしまう。我々はただ校舎を使うだけ……となりがち。「学校使い方調査」によって、設計当初考えていた設計コンセプトと運用後の実態を照らし合わせるこ

とは大きな意味があると思います。教育委員会としても、次の設計に活かれますよね。

新川 設計は使う人の意見を聞きながら進めます。常々、竣工後の様子は気になっていましたが、私たちとしても「学校使い方調査」を通してたくさんの発見がありました。設計者と運営者がお互いにフィードバックできる接点をもつことで、おっしゃる通り、他校の建設にも活かれます。これは全ての竣工物件で実施した方が良くと思いますね。現場の先生方が、いろいろと試行錯誤しながら使っていたいただいていることも知れて良かったです。

柴田 実際に校舎を使っている先生方とお話

ししてみて「よりよく使っていきたい」という思いを感じました。建物のポテンシャルを最大限に教育現場に活かすためにはどうしたらいいか？と先生たちも考えてくださっている。一方で壁になりやすいのが、数年で先生が入れ替わってしまうこと。どういう意図で建てられたのか、想いが受け継がれていきません。今回のように竣工後、時間が経ってから使い方調査をして、その調査結果を報告会という形で使い方の実態と設計当時の想いを伝え、みなさんと共有することで、先生方の意識にも変化があったと思います。

——竣工後、使い始めの頃に特に工夫していたことはありましたか。

萩原 設計段階には絡んでいませんが、当時の監理の方からコンセプトを丁寧にお話していただきました。そしてそのコンセプトを最大限活かすため、家具の配置や使い方を考えていきました。たとえば、中央にある「白馬ラウンジ」には、画一的な四角い机ではなく、勾玉型のような机が似合うと思いました。特に、全生徒から見える共有スペースの使い方には頭を使いましたね。

柴田 やはり使い方調査の大きな意義として「設計コンセプトの貫通」があると感じます。

ただのフィードバックの場ではなく、「継承の場」であって「発展の場」でもあるということ。なぜその空間をつくったのかという設計意図を、生徒や先生方に伝えることは大切ですね。

新川 コンセプトをより花開かせていくための調査は、これまでありませんでしたから。竣工後に実施する「^{かしげんさ}瑕疵検査」とは全然違う。

運用者も設計者も、お互いに多くの気づきがある、未来に繋がる活動になると思います。

萩原 あと、場所の命名も大切ですね。中央のラウンジは、当初「生徒ラウンジ」という名前でした。でも生徒たちがこの名前で集ま

るとは思えない(笑)。じつは昭和高校は、毎年長野県の白馬で移動教室を行っていて、その寮を売った財源で家具を購入したんです。それで「白馬ラウンジ」に。学生にとっても馴染みのある名前になりました。

柴田 場所の呼び方は、私たちも議論していました。教室や講義室と呼んだ途端に、使い方が強制的に決まってしまう。そうすると、生徒も先生も使いたくなくなっていく。いかに内発的な活動を引き出す名前にするか。「勉強しなさい」と言われたら勉強したくなくなるのと同じですね(笑)。

特集 02 Special Talk

全国高等学校長協会 萩原会長

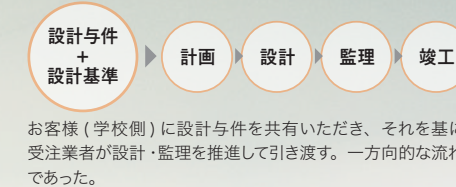
学校は「使い方調査」でさらに育つ

脱つくりっぱなしプロジェクトとして始動した「学校使い方調査」。※右図参照

竣工後6年経った東京都立昭和高等学校の調査結果を、当時の校長先生である萩原聡先生と振り返りながら、本調査の意義と効果について伺いました。またその先に見えてきた「これからの学び」のあり方とは。

学校使い方調査の意義とは？

【一般的な流れ】従来の設計のあり方



【類設計室のスタイル】これからの設計のあり方



株式会社 類設計室
計画房
柴田英明

都立昭和高等学校の学校使い方調査統括を担当。数多くの学校使い方調査を担うことで、学びのあり方を生々しく追求し、提案につなげている。

全国高等学校長協会 会長
東京都立西高等学校 統括校長
(東京都立昭和高等学校 前校長)

萩原 聡

都教育庁指導主事を経て、2012～2016年、都立昭和高校の校長として「二兎を追い、二兎を得る。」を具現化する新校舎運用を先導。2019年より現職。

株式会社 類設計室
ディレクター
新川啓一

都立昭和高等学校の設計統括を担当。数多くの教育・研究施設の設計統括を担い、竣工後も施設の使い方調査を含め、一貫して生涯パートナーとして関わる。

公立校は、教員の入れ替わりも多い。 使い方調査で想いを継承していただく 意義があります。

生徒の主体性を引き出す、 動線づくり。

——学校使い方調査の目的を考えていくと、「より良い学びの場とは何か」という話に収束していきます。近年、生徒たちは「主体性」を求められているかと思いますが、「主体性」を引き出す場についてどう考えますか？

萩原 昔は、学校って勉強のための場所でした。授業が終わったら帰るだけ。そういう時代であれば、ただ部屋があればよかった。でも、いま生徒が求めているものは「仲間」です。仲間との交流が生まれる仕掛けをたくさんつくっておくことが「主体性」につながると思います。

新川 具体的にそのように感じられる場面が増えているんですか？

萩原 SNSだけのやりとりより、会って話をしたり、いっしょに何かすることを求めていますね。学校はそれができる空間をどれだけつくれるか。画一的じゃなくいろいろなパターンで。じつは新校舎の中では、大きなロビーじゃなくて少しこじんまりとした場所

では、特に女子生徒が廊下にワッと集まっていた。今回の調査で、一番印象に残っている風景です。あんなに廊下でおしゃべりをするんだな、と。

柴田 日常的に誰かの活動が目に入るのは大事ですね。その活動を見て、生徒の主体的な活動が伝播していく。建築側としてはその輪が広がる場所をつくりたい。あと、子どもは意外と先生がいる場に集まりますよね。5分休憩があったら職員室の前に群がっています。先生は生徒のメンターであり、サポーターでもありますから。職員室をどれだけ子どもたちに近づけて親しみやすくするかは重要なポイントだと感じました。

萩原 ひと学年が廊下でつながっていたのが良かったですね。同じ学年内で何か場を共有する時は、やはり廊下を活用していくと早い。もし半分のクラスでフロアを分けていたら、学年が分断されて、まったく違う動きをしていただろうと思います。そこは設計の工夫ですよ、きっと。

柴田 有効幅員2メートルの廊下ってものすごく狭いです。それでも生徒たちが教室から出てくるのは、廊下にロッカーがあるのと、明るくて気持ちいいから。1時間でもずっと

おしゃべりしてますよね。気持ち良い空間でないと、人は離散していくものです。

萩原 あの廊下是多摩の木材仕上げで、温もりを感じますよね。床のトーンもそう。とても落ち着ける、精神の安定する色合いや素材感。これも生徒たちが集まりたくなる仕掛けなんだろうなあ。

柴田 明るさ、風通し、木の温かみ。共用部のつくり方を工夫するだけで、生徒たちの世界は、教室の外へ外へと広がっていく。これもまた新たな気づきですね。

新川 「ここは居てもいい場所なんだ」と本能的に感じさせるつくりというものもあるはず。教室はもう少し広さがあれば、もっとグループワークができたりするけど……、今の学校基準だと床面積もガチガチに決められているので難しいですね。一斉授業に適したつくりになっていますから。

萩原 これからは校舎内にもっと自由なスペースが増えていくといいですね。どこでも良いというわけでもなく、生徒たちの動線の交差点につくるのがミソ。学校中の情報がその交差点に集約されていくようなつくり。今後、新たな学びを発展させるために、まだまだ工夫できると感じます。

学びの場であり、 仲間と共にある場。

——2020年はコロナ禍や新指導要領など、学びのあり方が見直された時期でした。教育現場における変化を、どう感じていますか？

萩原 感染症の流行となると、集団教育の難しさはありました。でも、生徒は仲間といっしょに何かをしたい気持ち強い。学校が休業の間も、生徒は「どうしたら離れていてもみんなで一体になれるだろう」と考え、動いていました。たとえば、オンラインで合奏ができないかと、吹奏楽の各パートの映像を集めてラジオに投稿したりとか。もちろんオンラインでも授業はできますが、学力だけじゃない「学び」が学校にはあるんだ、ということをもみんな認識したはずです。「仲間と

集まる場」としての学校の意義をあらためて感じています。

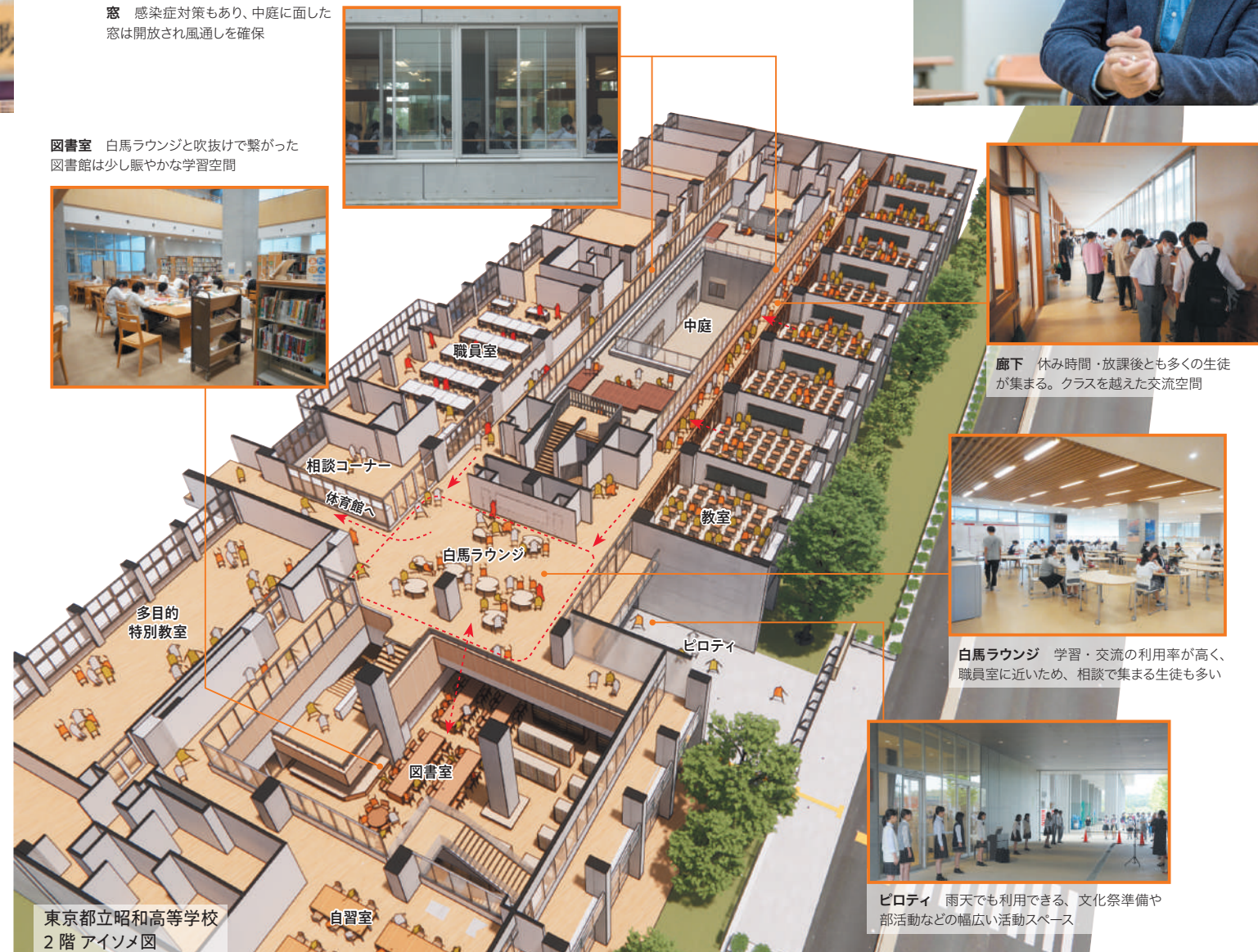
柴田 生きる力に直結するのは「活力」だと思うんですね。日本は活力がどん底と言われているけど、その突破口になるのは「仲間」だと思います。そのためには、人が集まりたくなる場を意識的につくっていくことが大事。昭和高校の生徒はみんな生き生きとしていました。そして、自分が可能性を感じる何かに没頭していた。勉強だけの学校じゃなくて、遊びも含めた創造活動ができる場があることがポイントですね。

新川 その一方で、仲間づくりが苦手な子もいます。心の中では仲間を求めているけど、上手くコミュニケーションができない子。そういう生徒の居場所を守ることも公立校に求められていますよね。

萩原 確かに、私学と公立の違いかもしれません。公立にはさまざまな生い立ち・経験をを持った多様な生徒たちが集まります。だから、運用者たちがその時々生徒に合わせて育てていけるような、柔軟性の高いコンセプトが大事なんです。私学だったら、これ！と決めた学びのコンセプトを実現することが叶うと思いますが、公立校はそれは難しい。数年で教員が入れ替わってしまうから。改めて、今回のような使い方調査でコンセプトを継承していただくことの意義を感じますね。

窓 感染症対策もあり、中庭に面した窓は開放され風通しを確保

図書室 白馬ラウンジと吹抜けて繋がった図書室は少し賑やかな学習空間



廊下 休み時間・放課後とも多くの生徒が集まる。クラスを越えた交流空間

白馬ラウンジ 学習・交流の利用率が高く、職員室に近いため、相談で集まる生徒も多い

ピロティ 雨天でも利用できる、文化祭準備や部活動などの幅広い活動スペース

東京都立昭和高等学校
2階 アイソメ図

が人気なんです。たとえば、階段の脇とか。そういうスペースで友人と交流する経験は、将来の人間関係づくりにも役立つでしょう。そしてその様子を、教員含めてみんなが横目で見られる仕掛けが大事だと思います。閉ざされた場所ではなくて、「あのラウンジで先輩たちが集まっているな。何をやっているんだろう」と興味掻き立てられるような。

新川 面白いですね。昭和高校の使い方調査

——これからの学びの集団単位は、どのように変わっていくと考えられますか。

萩原 授業でいえば、1クラスあたりの単位がどう変わっていくかだと思います。高校の場合、今は40名単位で募集していますが、小中は今後35名の単位になる話もある。ゆくゆくは17～18名とかの単位になる可能性もある。人数が少なすぎると……それはそれでいろいろな議論が生まれるでしょう。柴田 今後、講義型授業における単位人数は減っていくと見通しています。しかしいきなり教室をなくすというよりは、探求型の小グループに分かれながらも、みんな一同に会していくような学びが増えていくでしょう。そうすると、壁なしで動き回れるようにという意味で、東京都の方針のような「ホール」の仕様が増えていくのでしょうか。

萩原 そういう方向になっていくでしょう。昔みたいに、ずっと同じ教室に居続けるような授業のスタイルはもうなくなりつつある。高校の場合、必修科目が全体の1/2近くを占めていますが、大学受験で必要な科目は、

その必修科目だけではカバーできません。自分が受けたい大学によって、一人ひとりが授業やクラスを選択していかないといけない。その意味でも、今の教室はちょっと身動きがとりづらいですね。

「遊び」のプロセスにこそ、学びがある。

——子どもの成長に応じたこれからの学びについて、考えをお聞かせください。

萩原 幼稚園や保育園は遊びを通していろいろな学びを得ることになりますよね。昔から砂場なんかはそうです。それが小学校になると途端に、急に席に座って勉強することになる。そうじゃなくて、もっと子どもの成長に寄り添った学びの場づくりが大事だと思っています。

新川 そうですね。遊びはルールが決まっています。ルールは友だちといっしょにつくっていいし、つまらなくなったら変えてもいい。それに、屋外は陰ったり直射日光になったり、屋内に比べて刺激が多いんです。体と

頭はつながっているから、自分たちで考えて答えのない問いに追求していくベースは「遊び」にあると最近強く思っています。

萩原 幼稚園児の頃って、子どもはみんな自分が中心。そこから成長するに従って、仲間と何かをすることの面白さを少しずつ見出していくんです。幼小教育はまさにその過程にある。だからこそ「みんなで何かを成し遂げる」ことが面白いと感じる、心地よいと感じる、そんな場づくりができると良いのですが。

柴田 社会に出てから成果を出せる人は、自らやるべきことを見つけ、仲間を集め、可能性を示して、集団をまとめられる人だと思っています。そんな人材を育てるためには、いかに幼少期に「仲間と楽しい追求ができたか」が大切です。その究極が、「遊び」。既存の遊びをやるのではなく、仲間に合わせて自分でつくりたり、ルールを教え合ったり、役割分担をしたり……。その過程に「学び」があるのだと思います。

萩原 そうですね。事実、人づくりのベース

は高校までかなとも思うんですよね。多方面から強く影響を受けやすい思春期の間に、いかにつくられたものだけじゃなくて、子どもたちが創造していける機会を用意してあげられるか、が重要ですね。

——最後に類設計室と取り組んでみていかがでしたか？

萩原 良い経験をさせていただきました。設計者の方々と共に「これからの学び」について議論できることがまず斬新であり、面白い。これからの学校設計においても、ぜひ昭和高校の調査事例から得た気づきを活かしていただきたいですね。類さんは、変わりゆく学びの場に対応しながら本質を考えられる、優れた設計事務所だと思います。

また、公立校の校舎は、50年、60年と使われていき、学校そのものはずっと残り続けます。でも、そこに通う子どもたちはたったの3年間だけ。その子どもたちが限られた青春を過ごす場ですから、使う人、空間、時間のバランスを考えて、これからも学びの場をつくっていただくことを期待しています。

新川 未来を考える場を広げて、共に創っていくことが、私たち設計者の使命だと考えています。本日はありがとうございました。



昭和高校の外観 敷地周辺の木立に呼応する縦基調のデザイン。壁面緑化により、緑豊かな地域の環境と協調する。

東京都立昭和高等学校 概要

所在地 東京都昭島市 東町2-3-21
 主要用途 学校
 施主 東京都
 施工会社 関東建設株式会社
 敷地面積 28,193.61㎡
 延べ面積 13,888.77㎡
 階数 地上4階
 最高 22.18m
 主体構造 鉄筋コンクリート造 一部 鉄骨造
 設計期間 17ヵ月
 施工期間 25ヵ月 (2015年3月竣工)

□学校使い方調査での気づき

2016年から取り組み始めた「学校使い方調査」。高校に限らず、幼・保・小・中・大学・学生寮などの調査を実施。数多くの気づきを発見しています。



異年齢で学び合う光景は現代の寺子屋のよう。



学校使い方調査中の類社員。

世田谷区立若林小学校・世田谷保育園

世田谷区が“遊びの基地”として運営する新BOP（学童クラブ）では、異年齢の子どもが集まって遊び、学び合っています。自然と年齢が上の子が下の子の面倒を見る役割を担い、先生は子どもたちを見守るだけ。その光景は、まるで江戸時代の寺子屋のようです。



トイレ前が子どもの集まる人気の場。



ビオトープにて熱心に観察する子ども。

中央区立豊海小学校・豊海幼稚園

「一番好きな場所は、トイレ前のラウンジ!」。子どもたちが元気に案内してくれたのは、用意されたオープンスペースではなくトイレ前でした。日常的に使う場所だからこそ、よく集まっているようです。ビオトープでは、生態系の観察もギリギリまで顔を近づけて追求しています。



開放的なスペースで友だちと本を読み聞かせあう小学1年生。



図書館はみんなの居場所。本を探しまわる子どもたち。

京都市立京都京北小中学校

校舎の中心に位置するメディアセンターは、京北の子どもたちのお気に入りの居場所です。開放的な吹き抜け空間の中で書棚の間を駆けまわり、のびのびと身体を動かしながら楽しんで使っている様子が伝わります。大きな木造の柱と屋根に包まれて、学ぶ意欲の向上にも繋がっているようです。



学校使い方調査 報告書



学校使い方調査 報告会



高校の話題から、幼稚園・保育園の話まで。遊び、学び、人づくりへと対談は盛り上がりました。

仕事能力の高さは、どれだけ遊んできたかに規定される。

社会に出て伸びる人は、ほぼ例外なく、子どものころによく遊んできた人です。それは、活躍している経営者の方々にも言えます。そういう人は、人間力も豊かで、ものごとを追求する力や先を読む力も優れています。逆に、遊ぶのを我慢して勉強ばかりしてきた人は、人間力も追求力も貧弱な人が多い。つまり、能力の高さは、子どものころの外遊びに規定されています。それはなぜでしょうか？ひと昔前まで、子どもの遊びはほとんどが大人の仕事の真似事でした。それは哺乳類の本能だからであり、たとえば子犬のじゃれ合いも、狩りの予行演習になっています。つまり、遊びはその先の仕事に直結しており、体力も関係力も追求力も、生き抜くために必要な基礎能力のすべては、遊びの中で形成されてきたからです。

学校の勉強が、追求本能も遊び本能も性本能も封鎖してきた。

学校の勉強ばかりしていると、どうして生き抜く力の形成が阻害されるのでしょうか？そもそも学校は徴兵制の一環として設立されました。その目的は、命令に従順な国民をつくることにあり、したがって、学校は教師の強制圧力で成り立っています。この強制圧力によって、小学校では子どもにとって最も重要な遊びの時間が奪われると共に、遊び本能が封鎖され、中学校では人類最大の活力源である性本能が封鎖されます。そのかわりに、漢字と加減乗除以外は何の役にも立たない、一面的で偏った知識が詰め込まれます。

上から教える教育は、生き物の成長原理に反している。

学校教育が始まって150年、その間に、日本人の言語能力と追求力はドン底にまで低下

してしまいました。これは、学校教育が国民をとことん無能化してきた疑問の余地のない事実です。なぜそこまで無能化したのでしょうか？学校が追求本能や遊び本能や性本能を封鎖してきたことが根本的な原因ですが、もう一つ、「上から教える教育が、生き物の成長原理に反している」ことも、大きな原因です。たとえば、言語能力の形成についていえば、赤ん坊は、周りと一緒にしたいという本能のままに、ひたすら、聞いて、真似して、学んでいきますが、そこには教える人など存在しません。100%内発で、言葉を習得していきます。遊びについても同様で、子どもたちは100%内発で、関係力や追求力を身につけていきます。それに対して、学校は、上から教える教育に貫かれています。それは生き物の成長原理に根本的に反しています。親や教師が信じている「教えたなら分かる」というのも、事実には反する錯覚で、じつは、上から教えられたことは、ほとんど身につきません。身につく

のは、遊びがそうであったように、自分の頭で（内発で）追求した認識だけです。

従来の教育に対する真摯な総括と深い反省。

学校教育によって生み出されたのが、活力も能力もドン底にまで低下した日本人であり、人類滅亡の危機に陥っても、思考停止したまま支配階級に踊らされ答えを出せない現代人です。教育に携わる者は、その事実をまず直視する必要があります。そしてあらためて、生命の成長原理に倣わなければなりません。

類学舎が、綺麗事だけの偽物の新教育と異なるのは、この事実を真摯に総括し、子どもたちの本能（遊び本能、追求本能）を根本から再生しようとしているからです。

特集 03 | Close Up | 類学舎 | 本源追求で実現した〈類学舎〉

類設計室は1972年の創立以来、社会情勢や人びとの期待に応え、教育事業、不動産事業、農園事業、社会事業と、さまざまな事業に取り組んできました。そして2019年には、全日制的新たな学び〈類学舎〉を開きました。この特集記事では、類学舎開学に至った類グループの志についてや、ここで子どもたちはどのように過ごし、何を学んでいるのか。そういった背景や取り組みなどをご紹介します。



● 類学舎での学び（時間割の例） ●

初等部・中等部・高等部の3部制で、
下記のような時間割が編成されています。

1日の流れ

9:00
↓
10:10

外遊び・仕事研修

近くの公園や河川敷に移動して外遊び。何をするかは、子どもたち自身で決めます。



10:20
↓
11:30

学び・自主追求

国語や数学といった教科の勉強は「内発型学習法」で、体や声も使って短時間でマスター。



11:30
↓
12:30

昼食

朝から頭と体をたくさん使うので、午後の探求
&仕事に備えて充電タイム。お昼寝もOK！

12:30
↓
14:00

探求

自然現象や社会現象を対象に「なんで？」「どうする？」をとことん追求する時間です。



14:00
↓
18:00

仕事

それぞれの配属先に移動して、仕事開始。体験ではなく、本物の仕事を担います。



歴 史
変 遷
COLUMN

世界最高水準の学びが、日本にあった。

学び
遊び → 働く

150余年前、日本全国には15,000軒以上の「寺子屋」があった。寺子屋は、集落の大人が半専任で運営した教育機関。一軒あたりが15～30人程度で、5～14歳の子どもたちが約6年通った。当時、国民の識字率は80%を超え、世界最高水準の成果を誇った。

右の浮世絵は、寺子屋の風景。誰一人、先生の方を向かず、楽しそうに遊びながら学び、先生はそれを見守るだけ。「読み・書き・そろばん」を基本習得とし、親の職業に合わせた往来物（教科書）で実用的な知識を学んだ。遊びが仕事に直結するため、強制にならず、自ら学び合う子どもの成長を支えていた。

寺子屋の学び方は、社会に出てからの大人の学び方と同じだったのである。明治以降の学校教育とは真逆の姿が、かつての日本にあった。



画：一寸子花里（歌川花里）
「文学万代の宝（始の巻）」
出典：東京都立中央図書館特別文庫室所蔵



仕事

相手の期待に応える仕事は、追求の連続。現実の壁にぶつかり、仲間と「どうする？」を追求する中で、社会で求められる本物の力を身に付けていく。

遊び・仕事・探求で、社会を生きる力が開花する。

これまで学校では勉強がつまらなくて無気力だった子も、「遊び・仕事・探求」を軸とした学びの中で、日々いきいきと成長しています。ここでは、実際に類学舎に通う、学舎生の声をご紹介します。

楽しい、悔しい、感情があふれる毎日。

学舎生・小5男子

学校の授業は聞いているだけだから真顔、だけど仕事では楽しさがあるし、達成できないときの悔しさもあるから、毎日感情にあふれている。男同士だと普段おしゃべりはあんまりしないけど、仕事や探求、遊びで仲間たちといろんな話をするから一体感が増す！



探求

仲間と自然現象や社会現象をテーマに、グループで追求。現象の背後にあるさまざまな事象を構造化し、追求力を磨く。

仕事をする中で、人に想いを伝えられるようになった。

学舎生・中2女子

人にどう思われているかが気になり、思っていることが言えない性格だったけど、仕事をする中で、いっしょに仕事をしている人に思っていることを伝えたと安心するし、成果も上がることが実感できた。自分の不安でいっぱいだった時よりも、みんなと「課題どうする？」を考えている今の方が頭もいっぱい使うし、活力が湧くし、力になる。

遊び

ほぼ毎日、外遊び。常に「もっとみんなで楽しむには？」を考え、仲間たちといっしょにルールや役割を決める。その中で追求力や関係力、発信力が育つ。



高1で高卒認定試験一発合格！できた2年半の余裕で、いま社会で求められていることを掴む！

学舎生・高1男子

類学舎に通い、気が付いたのは、これまで活力が湧かず、何もしたくない自分を「ダメな人間だ」と思っていたが、そうではなく、学校の強制圧力が人間をダメにしようということだった。類学舎に「個人課題」はなく、すべてが「追求課題」。本気で追求できる仲間がいる。毎日みんなで自主的に課題に向かっている。「将来役に立つ人材になりたい」と考えていた私にとって、求めているものすべてがあった。あれだけ嫌いだった勉強も楽しくなり、高1の夏で高認試験も突破。同級生が高校を卒業するよりも2年半早くこれからの将来を考えている。大学進学でも何でもできる。けど、やはり今は動くほどに相手の活力を生み出せて、現実を変えられる仕事に一番魅力を感じている。

その他にも保護者の方からは、「我が子ながら『こんな人材が育つのか！』と驚きです」「これまででは子どもの成績ばかり気になっていたけど、明るく楽しそうに学ぶ姿を見て心が軽くなりました」「いきいきたくましく成長する息子の姿に感動しました」など、とてもうれしい声をいただいています。

どうすれば、子どもたちと現実の圧力を共有できるか？

類学舎で、常に意識していることと、最も難しいことは、じつは同じです。それは、「どうすれば、子どもたちと現実の圧力を共有できるのか？」。子どもたちには、「社会はどうなっているのか」「お客様や仲間の期待は何か」「実現の壁になっているのは何か」「今、どんな問題が起きているのか」「自分たちの言動がどんな影響を与えるのか」「現実課題におけるシビアな成果・評価はどうか」など、彼らが捉えられていない外圧を可能な限り伝えることを、類学舎に関わる全員が意識しています。そして、いっしょに、答えのない現実の課題に対して、「何で？どうする？」を考え続けること。答えがないのだから、当然、大人も子どもたちに相談しますし、自分たちの上手くいかないところや不十分な仮説もすべて見せていくことになります。したがって、そこに「教える→教えられる」「育てる→育てられる」の一方的な関係はありません。

そんな中で、子どもたちは、大人たちの予想を裏切って、勝手に成長していきます。その変化の中身にも、タイミングにも、スピードにも、驚かされてばかりです。「類学舎では、上手くいかないことや壁にぶつかることの方が多。でも、現実それが普通なんだ



【類塾：授業担当】どうしたら生徒の意欲と追求心を引き出せるか試行錯誤の連続。



【本社・システム室：プログラミング】プログラムを使う人のことを考えてコードを組んでいく。

と思う。それに対して、何で？どうする？を考えるから毎日が濃い」。小学4年生は、類学舎での日々をそう話します。現実とは未知なる課題だけでなく、何で？どうする？の繰り返しであること、それこそが主体的に生きていくことだ、という真理を掴めている大人が、果たして今の日本にどれだけいるでしょうか。上手くいかないことを人や環境のせいにし、生きる場も課題も答えも用意してもらうのが当たり前だと思っている大人たちこそ、子どもたちを見習うべきではないでしょうか。実際、彼らの真っ直ぐな心と柔軟な頭に、大人たちが気づきやヒントをもらい、心や襟を正されることも少なくありません。

そもそも「能力」とは、外圧に適応するた

めに必要になるものです。したがって、現実の外圧を直視し、適応するために、周りを真似したり仲間と追求する中でしか身につけません。

だから類学舎では、体験ではなく生の仕事そのものを担い、探求で答えのない現実課題を扱っています。生産課題から切り離された異常空間の中で、自由・権利・みんな仲良などの架空観念や、実験室の中でしか通用しないエセ科学を扱わざるを得ない学校は、「現実の圧力」という点で致命的な欠陥を孕んでいます。これからの学び（＝人材育成）においては、「圧力と追求仲間の存在が、意欲と能力を育む」という生命原理を、どう教育に取り入れるかがカギになるでしょう。



【設計室：製図】「この建物にはお客様のどんな期待がかかっているか？」に想いを馳せて線を引く。



【本社・広報室：チラシづくり】どうすれば魅力が伝わるかを追求し、文章の一言一句まで詰める。

類ビル



河川敷や公園で外遊び 遊び

本源追求のいま

さまざまな建築プロジェクトを通じて、お客様とともに活力ある未来を描くために。私たちの挑戦は続いています。

五感を刺激し本能を解放

たちばな大路こども園



生きる力を育む、
みどりの丘

所在地_滋賀県草津市
竣工_2018年3月
用途_幼保連携型認定こども園
規模_地上2階/S造+RC造
面積_2,100.77㎡(延べ面積)

生きる力の根っこ(心の根)を大切に育てる園舎にしたい、という園長先生の想いを受け、心ゆくまで自然あそびができるこども園をつくりました。園庭を中心に立体的に周回できる天然芝の回遊動線を巡らせた「みどりの丘のこども園」です。

意匠房キャップ 安藤広海



期待と喜びで胸躍る、 心からの笑顔をつくる特別支援学校

所在地_東京都足立区
竣工_2020年8月
用途_特別支援学校
規模_地上3階/RC造+S造
面積_29,060.80㎡(延べ面積)

肢体不自由と知的障害の2部門を併置した特別支援学校。自然素材や四季の移りを感じられる、子どもたちの日常生活の場を目指しています。多様な障害の子どもたちのために、学校職員とも連携しながら設計を進めてきました。

監理室チーフ 佐藤晴彦



東京都立花畑学園



地域の中で 関係力を育む

中央区立阪本小学校



地域の手で子どもを育てる、
“一番校”

所在地_東京都中央区
竣工_2020年5月
用途_小学校・幼保連携型認定こども園
規模_地下1階、地上7階/RC造
面積_13,247.12㎡(延べ面積)

第一大学区、第一中学区、第一番官立小学校阪本小学校。150年近くの歴史を持ち、“一番校”として長く愛されてきた旧校舎のデザインを継承する設計としました。地域の伝統や想いが未来に繋がっていくことを願っています。

計画房キャップ 穴瀬博一



地域活動をつなぐ 複合施設としての学び場

所在地_大阪府豊中市
竣工_2023年4月(予定)
用途_義務教育学校、図書館、地方公共団体支所、保健センター、公民館、児童福祉施設等
規模_地上4階/RC造
面積_30,090.64㎡(延べ面積)

豊中市初の小中一貫校で、学校と公共施設が複合した多世代交流拠点の計画。小中一貫校、図書館、老人福祉センター、子育て支援センター等を一体整備し、子どもたちが地域の中で学び、成長していける場を創ります。

意匠房キャップ 田宮昌明



豊中市庄内さくら学園(仮称)南部コラボセンター



新たな学び合いの場づくり

松田町立小学校



自然と歴史を感じる
準耐火木造校舎

所在地_神奈川県足柄上郡松田町
竣工_2023年1月(予定)
用途_小学校
規模_地上3階/木造
面積_6,403.97㎡(延べ面積)

140年間、地域に根差してきた松田小学校。50年前に木造校舎があった場所に、新たに木造校舎を建設します。木造3階建て校舎は公立学校として全国3校目。在来工法の普及モデルとしても、新しい学びの場を拡げていきます。

ディレクター 林 昭光



学部を越えて出会い学ぶ 大学の新たな顔づくり

所在地_京都府京都市
竣工_2021年3月
用途_大学
規模_地上6階 地下1階/S造
面積_11,126.11㎡(延べ面積)

本校舎はキャンパスの主動線に位置し、新たな大学の顔となる施設をつくる計画。さまざまな学部の学生が集うことで新たな出会いや発見を生む空間構成となっており、互いの活動や学びが相互に刺激を与え合い、向上心を高め合う学び場です。

ディレクター 齊藤 直



京都橘大学 アカデミックリンクス



常翔啓光学園中学校ワークショップ デザイン思考講座

study meeting

「自ら未来を切り拓く力」を育てる、 デザイン思考講座。

大阪工業大学 松井謙二教授が2017年より取り組んでいる「常翔啓光学園中学校デザイン思考講座」の原点は、徹底した現場・ユーザー思考です。社会的な課題がますます複雑化していく現在、自ら顧客の課題を徹底的に分析してその本質を理解し、多様なメンバーによるチームで革新的な解決策を創り出す力が求められています。

今回は、大阪工業大学の松井教授、井上教授、野村技師、武本技師の4名と、デザイン思考講座を運営した類設計室のメンバーで「探求型授業のこれから」をテーマに座談会を行いました。

これまでの「デザイン思考講座」

「自分の未来を自ら切り拓いていく人材を育てたい」。そんな松井教授の想いに触れて、類設計室は2018年から本講座に参画。毎年、現実社会の課題に取り組めるようなテーマを設けています。

2019年「社会とつながる学びをつくる」



2018年「未来の学び場をつくる」



2020年「コロナから学ぶ30年後の学びの姿」



デザイン思考講座 座談会

「教える教育」から、 「みんなで追求する学び」へ。

現代の子どもは、「正解のある課題」に取り組むのは得意です。しかし、その能力は社会では通用しません。学校の中で、用意された答えを探るうとする頭の使い方が染みついた結果、先生の顔を伺い、指示がないと動けない子どもが増えました。「デザイン思考講座」では、問いの答えを用意していません。答えのない課題を目の前にして、子どもたちは「自分だけでは解決できない!」と仲間や大人も巻き込んでみんなで追求を始めます。この未知の課題に取り組む追求プロセスが、「答

え合わせの思考」から子どもたちを解き放っていきます。自ら考え、みんなで追求する姿に、未来を担う子どもたちの大きな可能性を感じました。

同講座は、教員の意識も大きく変えました。イキイキと追求する子どもたちの姿を見て、これまで1から10まで用意してきた「教える教育」が、自分の頭で考える機会を奪ってきたことに気づけたからです。教員が担うべき役割は「この課題でどんな力を付けてほしいか」を鮮明にし、そのための道筋を組み立てること。子どもの「なに? なんで?」を引き出し、追求に向かう最初の一步を後押しすることで、あとは子どもたちが自ら学びを深めていきます。

コロナ禍によってオンラインコンテンツの質が急激に高まり、誰もが気軽に良質で最先端の知識

や学びに触れられる状況になった今、学びのあり方は確実に変わっています。「教える教育」で知識を与えるのではなく、「みんなで追求する学び」に導くこと。それが、これからの教育者に求められる役割だと考えています。

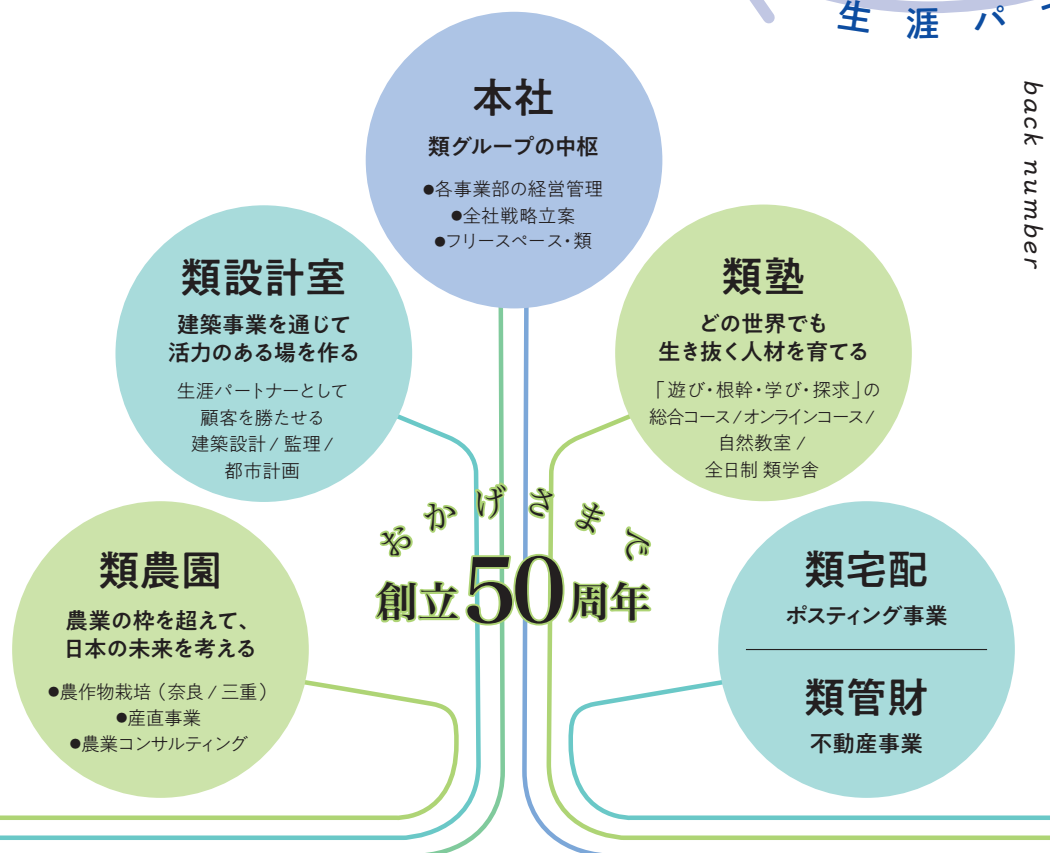


プロジェクトメンバー



類設計室とは

新たな経営・事業戦略を探求しているお客様に寄り添い、建築プロジェクトの構想から運用まで、生涯にわたる戦略パートナーとして、あるべき姿を追求していきます。



● 当社季刊誌をご覧ください、ありがとうございます。
類設計室が提供するサービスに関する資料請求・ご質問は、下記 URL かお電話にてお問い合わせください。

➡ 大阪：06-6305-6666 設計広報：橋本 東京：03-5713-1010 設計広報：朝日
MAIL：https://www.rui.ne.jp/architecture/form/form_arch.php



類を紐解く
キーワード

「類」語辞典

構造認識

【こうぞうにんしき】

「本源追求」の基となる考え方。ものごとの背後にある事実の構造を体系化することを指す。生物進化や歴史事実から、思考の対象が、どのような過程を経て現在の状態に至り、これからどう変わり得るかを解明する。それにより常識や思想に捉われることなく、自然の摂理に則った事実に基づいて判断できるようになる。この構造認識により類設計室は、人びとの意識や社会潮流を先読みし、建築設計に留まらない現実課題に答えを出していく。



援農

【えんのう】

類グループが取り組む農園事業に向けた支援や創造活動のこと。2020年のコロナ騒動から、類農園は食糧危機を見据えて増産に乗り出した。普段はオフィスや教室で働く各事業部の社員も農場に行き、柵作り、田植え、稲刈などの応援に取り組む。増産成果に加えて、広大な自然の中で頭より先に体を動かすことで、参加した人材の活力が上昇。人材育成の新たな機会となっている。

実現塾

【じつげんじゅく】

2015年に類グループが取り組み始めた、世界中の誰も答えを出していない追求課題を深く掘り下げる学びの場。世界経済や脳回路の仕組みといった未知の課題を、小学生から大人までがいっしょになって考えを深める。固定観念に染まらない、柔軟な思考を持つ子どもたちの発信はまさに最先端の意識潮流。2020年12月からはオンライン実現塾も始動し、対象を広く展開している。

活躍中の
メンバーを
類にご紹介

「類」人辞典

「本源」の
実現に向けて
追求し続けます！



企画室 /
入社10年目
小熊耕平

入社して10年目、これまで5つの部門を経験してきました。どれも専門性の高い領域でしたが、共通して得た気づきは、職能に頼りきった思考では答えは導きだせないということ。今携わっているまちづくり業務でも、新たな人との繋がりに刺激を受け、未知の課題がまだ世界には多くあることを身に沁みて感じています。そして、それは専門知識や個人の経験だけでは太刀打ちできないということも……。仲間を巻き込み、進むべき基準を見定め、仮説を組み立て、誰もが納得できる答えを導けるまで、追求し続ける。どんな場面でも、求められるのは向き合い続ける姿勢です。人びとの意識が大きく変わりゆく社会の中で、新しい時代を切り拓く場をこれからも追求していきます。

とことん充足を
追い求めます



企画室 /
入社10年目
佐保井路子

本社人材募集室、教育事業部の類塾を経て、設計事業部へ。これまでとは畑違いの仕事ですが、部門を横断して培ってきた経験が、設計業務の基礎となっています。私たちにとって、建築プロジェクトの軸にあるのは「組織づくり」「地域づくり」「人づくり」。建物を見つめるのではなく、背後にある組織や人びとのことまで想いを馳せる必要があるのですが、そこで各部門での経験が活かされます。たとえば、教室運営をみんなと協力して乗り切った経験は、「組織づくり」を考える上で役立ちます。子どもたちに元気になってもらうため試行錯誤した経験は「人づくり」に。そして地方創生プロジェクトで、厳しい現実を痛感した経験は「地域づくり」の糧となっています。これからも、関わる人たちと心から充足しあえるよう、追求し続けます！